
ただいま …友の涙…

グラキエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま…友の涙…

【NZコード】

N7426D

【作者名】

グラキエース

【あらすじ】

もう一人の自分と戦っている最中…一人の男がこう呟いた。「お前はもう…私を超えてる。」…前回投稿した『仲間だから…赤獅子乱入！…』の続編です！（ネスVS の悪魔 ユー）中 心一部ネス総受け・リュカネス等あり…

(前書き)

始めに

この小説には作者が勝手に考えた妄想文・グロ・出血・暴力・ネタバレ・キャラ壊しの表現が含まれて居ます！！

更に一部のキャラが擬人化しています！！（ノクターンノベル行きにしようとしましたが、作者の都合で止めました。）

上記の中でも一つでも当てはまつたお客様・年齢制限以下（精神年齢17以上は必要かもしれません。）の方はご退場お願いします。

大丈夫！自分の年・精神年齢は17以上あるよ！グロ？擬人化？？
そんなの平氣だあ！！な方はどうぞ！！

なお、苦情は一切受け付けません。自己責任で閲覧をお願いいたします。

今回は長めなので携帯閲覧の方は、パケット代にて注意ください。
(よつやくこの回で、ネスの右腕が繋がります。)

…スマブラ寮 地下一階 手術室前 …

マリオ「ネス…準備はいいか?」

白いストレッチャーの上にネスは仰向になつていて、更に体の上に暖かい毛布を二重に掛けられすぐ近くにいた医者の姿をしているマリオに言った。…これから俺の右腕を繋げるオペが始まるからだ。

ネス「どうで、マリオさん。俺を…」

その一言でマリオは無言でうなずき、田の前にあつた大きな扉が開く。

リュカ「先輩…」

マルス「ネス君…」

ロイ「ネス…」

後ろから付いてきてくれたスマブラメンバーである「リュカ、マルス、ロイ等」がいて、彼らはいつもながらの乱闘を中止し、手術室前まで付き添つてくれたのだ。俺は少し微笑して彼らに言った。

ネス「それじゃあ…みんな、行って来るね。」

ガノンドロフ「ああ、行つて来い坊主。俺達はここで待つてゐるからな。」

ソニック「Good Luck! 待つてゐるぜ、ネス! !」

ガノンドロフ・ソニックがネスに言つた後、ネスを乗せたストレッチャーが手術室のドアの中へと入り、静かにドアが閉まつた後、ドアの上有るランプが赤く点灯した。

フォックス「無事に…繋がるといいが…。」

フォックスが少し呟いた後、付いてきた仲間達はそばにある異常に長いソファーに座る。

リュカ「僕らは…出来る事ぐらいはやつてきたハズだよ。後は先輩が帰つて来ることを信じて…」

マルス「祈り…。」

リュカ・マルスが言った時仲間達全員は、手を組み合わせて祈り、この瞬間が全員一つになつた。

...無事に...繋がりますよひ

ネス「…暗い…何もかも…」

…闇に染まつた世界…

ネスの精神体は漆黒の世界へとゅつたりとした速度で、頭から落ちていく。

ネス「…僕の…俺の心が…離れそうだ…」

精神体のネスが、そつと眩いた時…

? 「離れちまえよ。如何わしい俺の光い！！」

ネス「！？」

突然、どこからもなく自分と同じ声…否自分ならぬ憎しみの声が響き渡り、ネスは先ほどのスタイルとは違い、乱闘前の警戒態勢を取つた。

ネス「誰だ！？」

？「オイオイ！俺をえ分からぬのか？…なーんて悲しいんだろう…！」

バキッ！！

ネス「ぐつー？」

右頬に硬い拳のようなものを的もに受け、ネスの体は後方へと吹き飛んだ。

ネス「S...Shit!...暗闇の中の攻撃は卑怯だぞ!...堂々と姿を現せ!！」

ネスの身体が硬い床らしきものに叩きつけられる前に、残っていた左手で受け身を取り、身体をクルンと回りながら綺麗に着地する。ネスは首を振り回しながら、不意打ちを仕掛けた誰かに言い放つ。

? 「ただの不意でピーーーと五月蠅い奴だなあ。避けられなかつた自分の腕を怨みやがれ！」

ガツツー！

ネス「！？ うあーー！」

暗闇の中から突然何かの手が現れて、ネスの首をそのまま掴みながら床へと押し倒す。ネスは首を掴んでいる手を残つてはいる左手で引き離そうとするが、掴まれている腕がとてもなく強く、思うように引き放すことが出来ない。

ネス「うぐー……ううー……」

? 「ハハハ！ お前の苦しそうな顔を見るだけでゾクゾクしちゃうよー。
！ なあ俺の光？？」

ネス「（う…お前は…）」

ネスは苦しそうに顔を上げると、暗闇から現れたのは自分と同じ顔
と服…顔は不気味に歪んでいて、背中から悪魔のような翼が出て
いた。

ネス「な……何故だ……お……お前は……あの時……ぐう……！」

ギリギリ...

ネスが続きを言おうとした時、更に強く首を絞められ意識が飛びそうになる。

ネスの悪魔「俺は死ない……いや、死は存在しない。お前が陰の闇の心を持っている限り、俺は何度も蘇るんだよ俺の光！」

ネスの首を掴んでいるネス…否ネスの悪魔は嘲笑いながらネスの体を持ち上げて、余っていた右腕を至る所にネスの体を殴り始める。

ネス「うぐつ！がはつ…ぐう…！」

ドスツ！ガスツ！…バキッ…！

ネスの悪魔「オラオラどうした…？右腕が無いから思つたどおりに力が出せねえのか…？ああ…？…？」

ドンッ！…

ネスの悪魔は、ネスの口から吐き出す返り血を顔に十分浴びた後、P.S.Iでネスの体を浮かびあがらせて無造作に投げ捨て、ネスの体はつづぶせのまま硬い床に叩きつけられる。

ドサッ！

ネス「ぐつー……ひゅ……。」

ぐぐぐ…

ネスはつづぶせの状態のまま、左手を震わせ両足に力を入れて、痛

みをじりえながら立ち上がる。

ネスの悪魔「おーおー。タフになつたなあ。俺の光!」

ネス「くつ……（3年前……あの時よりも強くなっている。……だ
けど……）」

口から出でていた血を左手で拭い、両目を少しの間だけ閉じてゆっくりと目を開いた時、ネスの両眼はいつもの黒い瞳ではなく淨眼に変わっていた。（マサエの力を出す時に出る、蒼い目の状態のことです。（設定））

ネス「また……しつこく蘇つたなら、もう一度三年前と回りよつて葬

つてやるー。」

バシュツ！…ネスの指先に緑の光が進る。

ネスの悪魔「出・来・るかなあー？片腕を無くした大怪我人がよお
！？！？」

タンツ！…両者は走り出し、全身体にPSIを宿した体術・超能力
が同時にぶつかり合つた。

… どこかの草原 …

ゴオオオオ

? 「 … ネス? ?」

ザアツ…と少しばかりの風が吹き満月の下の緑一色に覆われた中心部分に佇む人間…否どこにでも見かける白い服を着た下の部分から、紫色の長い尾が出ている人の形を保った生き物がいて、かつての仲間の氣を感じてその名前を呟いた。

ヒュウ…

? 「何者かと…戦っているのか?…」

乱れのない銀髪が風で揺らぎ、表情は無表情のままで、やや懐かしい彼との思い出でも見てているかのように、満月をそのまま見上げる形で見つめていた。

…わつか…己自身が産み出した闇の存在と戦っているのだな…ネス。

彼は遠くに離れていている場所でもコントクトができ、他人の行動を読み取れるのだ。彼の目は先ほどの紫の瞳から黄金色に変わつて、そのままの状態で満月を見上げる。

? 「私に新しい名前を与えて、人の心という物を教えてくれた… 私にとつて大切な主… そして…」

…闇に染まつた世界…

ネス「ハア！せい！…でやあ…！」

ネスの悪魔「オラ！オラ！…オラア…！」

強いPSHの連発攻撃が同時にぶつかり、たがいの身体はその生じ

バチツ！バチイイ！！

「「PK連打…！」」（コウカの下スマッシュです。）

両者は無駄の無い動きでPSHを宿した拳・蹴りで打ち合つ。そして両者は身体を捻らせて渾身のスマッシュ攻撃が同じ技で炸裂する。

た波動で後方へと遠ざかり、お互いの両足に力を入れて後ずさりを短くする。

ネスの悪魔「それ……」

バチイ……ネスの悪魔が右手に溜め込んだ紫色をしたPSIの塊を、野球選手のように球を投げつけて、PSIの力を加えただろうか豪速並みでネスに向かってくる。

ネス「はっ！」

ドオオン！！…ネスは落ち着いて横ステップで回避する。ネスは先ほど居た位置に視線を向けると、大きなクレーターが開いており、真顔でネスの悪魔がいる位置に見つめ直す。

「やはりあの時の件で、こんな～に強くなっちゃったぜ。お前がヤツ（マスター・ハンド）の魂を売ったことから…の…影響かなあ？」

ドドドドドッ！

ネスの悪魔の全身から闇の光が放たれ、マシンガンのよひにネスの全身体を狙つように襲い掛かる。

… ネス「つー… つぐー… そんなの… 昔の話だ。過去の産物など俺には

… ネスは PSI を駆使しながらネスの悪魔の攻撃をギリギリのタイミングで避けつつそっと呟く。

… 正直言つて、要らないもの… 聞きたくも無い話だ。

… ネスの悪魔「クツ！ハハハハ！… だがあ… あの時の思い出はお前がクタバル時まで永遠に消すことすら出来ねえ！… いや違うな…」

パチリ…ネスの悪魔は攻撃を止めて、背中の翼を広げ腕を組みながら、未来予知でもするかのように歪んだ顔で前方にいるネスに言い放つ。

ネスの悪魔「例えまたお前が来世に生まれ変わっても同じ過ちを繰り返す…断ち切ることさえ出来ない、悲しみ・憎しみが連鎖する輪廻…ヤツの意思をそのままの形を受け継ぐ…つてことになるだろ？ なあ！？クツハハハハ！！！」

キイキイ…キキキ…

ネスの悪魔がそう言つて遙か前方に立つてゐるネスに向けて高笑いし、ネスの悪魔が笑えば笑うほど周りの世界が永遠の闇へと染まつていく。

ネス「？」

ネスの下半身から何かの声が下から聞こえ目線を足元に向けると、複数の細い黒い手が現われて、ヒタリと下半身を掴んで徐々に上へと伸ばしていく。

ネス「そりやつて、人の弱い心の部分をバンバン言つて、三年前と同じ戦法で俺の力を半減させて自分のペースに持ち込んでいく：非常にズル賢いヤツだな。… This cruelty!（この非道

がー！」

ブチッ！キイイイ…

ネスは下半身に掴まれている複数の黒い手を霸氣で吹き飛ばした時
なんらかの悲鳴の声が響き渡った後、右足にPSIを宿した飛び蹴
りで、ネスの悪魔の体に向けて飛び掛ったが、彼は見下したような
視線ですんなりと避けられる。

ネスの悪魔「おーおー、精神面がめちゃくちゃ強くなっているなあ
～。これはビックリなんだろ？？」

ネス「Shit...」

ネスの悪魔がそう呟き、ネスはやや舌打ちをした後左手に緑の光を
集結させて、先ほどのネスの悪魔が仕掛けたPSIを飛ばす攻撃を
しようとした時…

グチツ…

ネス「ぐつ…？」

ネスは何かに噛み付かれた感覚を受け、やや痛恨の声をあげて左腹部を見ると、先ほどの霸氣で引き千切った黒い手の一部から鋭い牙を持った口が現われて、ネスの左腹部に噛み付いていた。

ネス「くつ…はつ…？」

シユルルルル！！

ネスは喰らい付いている黒い手を引き離そうと黒い手を左手で掴んだ時、瞬時に数えられないぐらいの黒い手がネスの全身に纏わり付

さ、そのつかの間へドロ状の液体になつた。

ネス「（ぬ……抜けない……それに……P.S.Eが使えない……）な……何をした！」

ネスの悪魔「お前が溜め込んでいた闇が投影されて、お前が知らな
い間に考えていた物と同じように……そのままの形となつて具現化し
たんだよ！クハハ！！」

グブブブブ……

ネスの悪魔が右手を上げた時、ネスの悪魔の背後からあのヘドロ状の液体が複数表れ、ある程度上った後静止する。

ネスの悪魔「あははっ！その淨眼の目でしっかりと、お前がこれから受けける出来事を焼き付けておけ！」

「ネス」「な…何を…？…つ…！…！」

「ゴポポポポボ！…！」

身動きが取れないネスにそう言って右手を前へと振り下ろした時、

ネスの悪魔の背後にあつた複数のヘドロが、なだれ込むようにネスの身体を覆い尽くす。

グチッグチュッグシユツ…

ネス「は…？…あ…！…！？」

グブブブブ…

ネスは声さえあげられないまま具現化したすさまじい量の闇の心をまともに受けて、視界がブラックアウトになり、自分自身の体と感覚が徐々に奪われていく。

ネスの悪魔「潰れる。楽になれ。…そのまま俺のよつに闇に墮ちてしまえ！アハハハハ…！！！」

ゴブツ…

ネスの悪魔はヘドロの塊に覆い尽くされ、ネスがいた位置に向けて嘲笑うかのよつに、更に大きく高笑いした。

ネス「（気が…重い…）」のまま…では…」

オオオオオ

視界が漆黒の闇に染まり、ネスの身体の至る所から黒いビビのよつ
な物が伸び始める。

ネス「（お…俺は…あ…の時と…ひ…違つ…俺には…くう…
…）」

ビキ…ビキ…ビキ…

ヒビが現われた所からネスの体が少しずつ分解し始め、ネス自身はどうすることもできず体と心が段々と闇の中へと消えていく。

ビキ...ビキ...ビキ...

ネス「お...俺は...」

ビキ...ビキ...ビキ...両足が消える。

ネス「か……帰つて……く……くるのを……」

ビキ……ビキ……ビキ……左腕が消える。

ネス「ま……ま……待つて……い……る……」

「ピキ...ピキ...ピキ...」 体が消える。

ネス「…………な…………か…………まが…………いるー!」

「ピキピキ...ピキ...

体の部分が消えていくにつれて言葉が片言になり、ネスの顔があと半分ぐらいいまで消えていった時……

? 「『俺には…帰つてくるのを待つている仲間がいるー』 とでも言
いたかつたのか？」

ネス「！？」

顔まで消えかけていた時、何者かの声が響き渡つて…ネスは、はつ
！？と大きく目を開くと、目の前には白い発光を全身に放ちながら、
乱れの無い銀髪・服の下半身から紫の長い尾を出している、人の形
を取つた男が目の前にいた。

ネス「あ…アンタは…」

ネスは安堵の笑みを出し、目の前の男がやや不適に笑った後、自分とは異なる力で消えかけていた体を再生してくれた。…ネスはこの男を知っていた。2年前、どこからの草原で彼と一度も戦い、不器用でありながらでも、力のコントロールを教えてもらつたネスならではの「師」と呼んでいた男…そして、

ネス「〃〃ウツー…いや、白き風…White wind…ワイン
ド…か。」

ウインド「お前の危機を感じて…私の精神体をこの世界へ飛ばしてやつて来た。」

ウインド…ミュウツーの新しい名前であり、ネスはそのミュウツーの名付け親であつてミュウツーの主人である。彼はクレイジーハンド軍団の戦いの後、様々な世界をこの眼で見るためにスマブラ寮から旅立つたのだが…

ネス「この世界にいるだけで精神体を保つのひとつこの…」

ジジジ…ネスが言つてゐる通りに、ウインドの精神体がテレビがよく映らない画像になりかけていて、雑音のよつな音も聞こえてくる。だがウインドはそんなことに気にしていないのか、余裕の表情でネスを見つめていた。

ウインド「大丈夫だネス。私は色々な世界をこの目で通し…経験して精神面も強くなっている。このぐらいの世界ならば私にとって易い物だ。」

ネス「アチャー。溜め込んでいた不の世界が「易い物」と言われちゃあ…俺…しょげるぜ（汗）」

ネスは苦笑しながら左手を額に当てる、やや落ち込む仕草をする。ウインドはそのそぶりにやや微笑した後、ネスの右腕の無い部分に向けて白い手をかざした時…

失った右腕が再生され、それと同時に銀色に光る長い物を持つていた。

キイイイイイイイイ
ン

ネス「う…ウインド…これって…?」

ネスは、右腕が再生されて手に持つてある銀色の長い武器を見て、やや驚愕する。ウインドは無表情のままでも言葉はややしく、その瞳には師を越えてしまいそうな感激の心が揺らいでいた。

ウインド「お前は私の技が使える…私はただ右腕を再生させただけなのだが、その銀色の武器はお前自身が産み出した物。つまり、お前自身には気づいていないようだが、私の技を受け継いでいたのだ。」

ネス「…。」

ウインドがそう言つた後、手を闇に満ちた空に向けてネスに言つた。

ウインド「ここから抜け出せ、今のお前の状態なら破れるはずだ。
それとあの空から…仲間達の声も聞こえてきているだろ？」「？」

ス

ネ
ス

…ネス…

ネス「…ああ、…もちろん聞こえるよ。」

ネスは耳を澄ませて静かに瞳を閉じると、ネスとウイングしか聞くことが出来ない、何も無い世界から聞こえる祈りの声…

ゼルダ（ネス…どうか…無事に帰つて来て…）

カービィ（戻ってきたら…一緒に野球しようつーこつぱこ遊びねえ
スう！）

アイク（俺はお前と戦つてみたかった！退院後…俺と一発試合しようじやないか！－！正々堂々で－）

ピット（時間が空いたら、ハンバーグの作り方…僕にも教えてくだ
きこよネスさん！－！）

マルス（ネス君…あの時君に出会つたことを…僕は誇りに思つた
だから…帰つてくれ！－！）

リュカ（僕は…祈ります…先輩が…この世界に帰つて来るまで…）

ロイ（俺は…いや、俺達は…お前の田^ミが開くまで、ずっと傍にいてやるから…田^ミ覚めるまで俺達がお前の肉体をなんとしても傷一つも付けな^シこ^ミつて守る…いや、絶対に守つてやる…）

ネスは仲間達の祈りの声を聞き、仲間が答えると共に銀色の長い武器を両手に持ち変えて、包んでいた闇の世界そのものを縦一筋に綺麗な軌跡を残したまま振り下ろした。

… これで、お前は私を…

ページ一

ネスの悪魔「アハハハハハ！……あ”？何だあ！？！？”

突然ネスを包み込んだ黒い塊にヒビが入り、ネスの悪魔は先ほどの歪んだ笑顔とは違つて驚愕の表情になる。

パキパキパキ…

ネスの悪魔「な…何なんだよ！…？？」

ヒビが出た部分からだんだんと大きく広がつていき、ヒビ割れた部

分から銀色の光が数箇所差し込んだ後…

パアアアアアアアン！…！

黒い塊が割れて、中から銀色の長い武器を持ったネスが出てきた。

ネスの悪魔「んな！？…何だよソレ！？…スプーン！？…スプーンで割つたのかよお！？…？」

ネスが持っている銀色の長い武器・銀のスプーンを見て、ネスの悪魔は数歩後退りし、スプーンから発する光は、この闇の世界にまぶしすぎるほどの銀色の光を放っていた。

ネスの悪魔「く…苦しい…眩しい…その光を止めやがれえ…！」

ドーン…ヒュウーン…

ネスの悪魔は苦し紛れに先ほどと同じようにP.S.Iの弾を投げつけたが、ネスは全身の周りに蒼いバリアを張つて、P.S.Iの弾を吸収し受けた傷を癒す。

ブウウウン…

ネスの悪魔の右手に、表のネスが必要な時だけ使う青い剣が現われ
ネスの左肩から右脇腹まで狙い定めて斬りつけようとした時、ネス
は瞬時にネスの悪魔が振るう蒼い剣を、銀色に光るスプーンで受け
止めて、鉄と鉄が擦り合い、火花を飛び散りながら鍔競り合いの状
態になった。

ギギギギギ！

ネスの悪魔「何あー故、お前の右腕が繫がったのは知らねえが…お
前がどんだけ強くなつても…！」

ズズツ！

「ネス「つ…」

ズズズ…ズ…

段々とネスが押され始めて、ネスは歯を食いしばりながら右足が少しづつ後ろへと下がっていく。ネスの悪魔は苦渋の表情を浮かべているネスを見て、嘲笑いながら余裕の笑みで言い放つ。

ネスの悪魔「この世界が存在する限り…今のお前でも俺には絶対に勝てにゃしねえ…光の俺ならわかるだろう?この世界はお前が溜め込んだ陰の「」ちやけり…五月蠅い奴だな。」

ドスツ！ドスツ！ドスツ！ドスツ！

突然スプーンの先端がフォークに変わつて、一つ一つの針が意思を持つてゐるかのようにネスの惡魔の左目・右肩・左脇腹を刺し貫いてしばらくの沈黙の後、悲鳴声が響き渡つた。

！」
ネスの悪魔「あ”！？？！…あ”！…あ”…アアアアアアアア！…！」

ズリュ…

尖ったフォークが引き抜かれて、ネスの悪魔は苦痛の声をあげながら、潰れた左目から血が一直線に勢いよく出でているのを無理やり手で押さえて止血しようとすると、ネスはその暇を「えず更なる攻撃を仕掛けた。

ネス「カービィ…技を借りるぜ。」

ダーンッ！ズビシュッ！！

軽く跳躍しフォーカ形態から元のスプレーに戻し、スプレーの先端にPSIを宿して身体を前方空中回転しながら一刀両断に振り下ろし、後に生じる衝撃…それを飛ぶ斬撃としてネスの悪魔の左肩部分を切り落とす。（ネス式・ファイナルカッター）

ネスの悪魔「ガツ…うおああああああ…！…！」

ブシユウウウウウ

ネス「切り落とされたぐらいで、大きく喚くなよ。」

切り落とされた部分から噴水のように血が出て、ネスの悪魔は悲鳴に近い声をあげる。ネスは身にしめた経験をなれているかのように、やや冷酷の表情でネスの悪魔に言つた後、

ドスツ！…シユウウウウ…

ネスの足元にネスの悪魔の左腕が転がり落ちて来て、ネスはスプレーからフォークに変えてネスの悪魔の左腕を刺し、刺されたところから紫色の胞子（亞空の使者のザコ敵が出てくるアレ）が吹き出て、左腕がボロボロに崩れ落ちながら消えていった。

ネスの悪魔「ふ…ふざけんな…お…俺が負ける要素なんて…!!
…み…認めねえぞ…!!…おおおおおおお…!!…！」

ネスの悪魔は、痛みと追い詰められている苛立ちと憎しみで我を忘れて、がむしゃらに蒼い剣を振り回しながらネスに近づいて来る。ネスは眉毛を少し下へ曲げてスプーンを斜めに構えながらそのままの体制を保つ。

ネス「マルス…ロイ…アイク…技借りるね。
」

ドシコッ……！

ネスの悪魔が振り回す蒼い剣がわずかにネスの体に当たった時、一瞬の内にネスの悪魔の体が横一筋に両断され、ネスの悪魔自身は何か起こったのかさえも解らず、臓器が零れ落ちる中体…否肉の塊が二つに分かれた。（見真似のカウンター）

ネスの悪魔「！？？？！？！」

ネス「悪いけど……俺の帰りを待つていてる仲間がいるんだ。決着を付
けさせてもらひつよ。」

キュウイイインーー（スマッシュシュボールを取った時の効果音）

ネスがそう言つた時、ネスの身体が黄金のオーラに包まれて瞳は淨
眼から黄金色に変わり果てる。（スマッシュシュボールを取った時の状
態）

ネスの悪魔「あ…アハハ！…だつたら…な…尚更あ…尚更あああ
あ！…！」

ネス「！」

シユウウウウウ！…！…！

ネスの悪魔はその状態になつているネスを見た後不適に苦笑し、ネスを囲つていた黒い霧がネスの悪魔に取り込まれて段々とその黒い霧が膨れ上がつていき、大きな巨人の形（ガレオム級）を保つた怪物が現われた。

ネスの悪魔「この世界を取り込んだ…莫大な闇の嵐に…その身」と
潰れろおおーーーーー

ドオオオオオオンーーーーー

腹の部分から巨大な黒い光線？みたいな物が吹き出て、覚醒状態の
ネスに襲い掛かる。

ネス「…いくぜ！」

ネスはそのまま動かず両腕を交差させて集中し、何かが弾けたように透き通った声で天に轟くほど大きく叫んだ。

ネス「PK Star Storm!-!-!- (PKスター・ストーム
!-!-!-」

ネスの悪魔「グオオオオオオオオ…おおおおお…！」

空から蒼い流星が雨のように落ちてきて、一つ一つの隕石が闇の塊を引き裂き、大きな巨大の体を後欠片も無く打ち抜き、周りを覆つていた闇と獣の咆哮が蒼い流星群に取り払われていった。

オオオオオ
…

… 空色に満ちた世界 …

ネス「（世界が空色… これは……）」

サアアアア
…

ネスは目を開けると、先ほどの闇に満ちた世界とは違い、現実世界で何時もどおりに見る青い空が広がっていて、足元は吹き出ている風で揺らぐ緑一色の草原が広がっていた。

ネス「コレはいつたい…」

? 「お前の本当の心の世界…溜め込んでいた闇が消え去つていっただけだ。」

後方から声を掛けられてネスは後ろに振り向くと、先ほどの人間を保った状態ではなく、本来の姿に戻ったウインドの姿がそこに居た。

ネス「ウインド！！」

ウインド「見事…「己」の影と闇を打ち破った。それに、あの技は素晴らしい。」

ウイングは無表情のままだが、言葉はまじへ…師を越えたとでも言つてゐるやうな言動で語りかける。

ウイング「お前はもう私を超えている。立派なスマッシュブラザーズの戦士になつたものだ。」

ネス「まだまだ…だよ。今回はウイングの助力とみんなの祈りで打ち勝つただけだ。それに…」

? 「つまりねえな…俺の光！」

ネス・ウイング 「…」「

ネスが続きを言い出せそうとした時、その言葉を遮るかのように憎しみで満ちた声が響き渡り、ネスとウイングは声をした方向へ体を向けると…

生首状態のまま顔が半分消えていて、紫の胞子みたいなものが頭部から零れ落ち、残っていた片目でネスとウイングを睨みつけていた。

ネスの悪魔「やつと俺の光を叩き潰すチャンスだったのに、下らねえ声援でこの俺が敗れ去るとはなー！」

ネス「お前つー！」

ウイング「生きてこたのかー！？」

ブウウンー…ウイングは両手から紫のオーラを出し・ネスは右手に

緑の光を発ちこめながら身構える。生首になつたネスの悪魔はその体制になつてゐる一人を見てやや嘲笑つた後、表情を歪んだ笑みに変えて言い放つ。

ネスの悪魔「俺の光い…先ほど俺が言ったことを覚えているよなあ？」

ネス「ああ…お前は俺の闇を持っている限り完全には消滅しない…つまりこの世界が元に戻つたとしても…」

ネスの悪魔はネスの答えを聞いて満足するよつた態度で、そのままの表情のまま言い返した。

ゴオオオオオオオツ ! ! ! !

厳しい視線で見つめるネスを見てネスの悪魔が狂つたように高笑いし、ネスの高笑いが響き渡るたびに風が強く吹く。

ウインド「確かに…闇は完全に滅ぼす」とすら出来ないが…我が主人の闇よ、何かを忘れていないか??」

ネスの悪魔「ああー? 何なんだ! ? ! ?」

ウインドはネスの悪魔の言つことに納得していたが、表情は二タリと笑いネスの悪魔はウインドの表情を見てやや苛立つて不機嫌な表情になる。

ウインド「例えまた…お前が蘇り我が主を倒そつと企んでいても…
我が主には…」

ブウウウン…

ウインドが言い欠けた時、ネスの周りにはホログラムらしきで物で現われた現実世界にいる仲間達がいて、一人一人がネスを守るよう^{ネス}に武器を・拳を構えて、ネスの悪魔を見据えていた。

ウインド「かつて宿敵・英雄だった者たちがいて…我が主には強い絆で結ばれた仲間がいる。」（こちら辺でスマブラX・メインテーマが流れていると思つてください。）

ウイングがそう言った時、ネスを囲っていた仲間達がネスに何かを語りかけていた時、仲間達全員が金色のオーラに包まれて、瞳が黃金色に変化する。

マルス（… わあ… 行けつか…）

ファルコ（… ぶつ飛ばそうぜ…）

ピカチュウ（… 一緒に奮おう…）

ドンキ・ゴング（… おっしゃあ準備万全だぜえ…）

微笑んだ表情を出している仲間達がネスを見ながら、穏やか表情で
ネスは一人一人見た後…

ネス「行こう！」

キュウイイイーン！！（スマッシュボールを取った時の効果音）

ネスも仲間達と同じように覚醒状態になる。

ネスの悪魔「な……な……。」

ウイング「我が主はもう一人ではない。彼こそはもう……」

リュカ（…先輩直伝…！…PK Star Storm…!…）

アイスクライマー（…いくよーー！…うる行くわよボボ…！…）

マリオ（…マ・リ・オ・フォイナル！…!…）

ファルコン（…音速を超えたスピード…見せてやるぜ…）

ウイングが言いかけた時、仲間達が一人づつ「最後の切れ札」を発動させて、ネスの悪魔は全員の攻撃をまとめて喰らい世界を金色一色に染め上げられた時…視界は眩い金色の光に包まれて、世界が見えなくなつた。

：新しい家族と共に生きて・戦つて・笑つて・競いあつて・前へと歩んでいるのだから。

ワインンドがそう言った後、彼自身も黄金の光に溶け込みながらこの世界から消えていった。

：スマブラ寮 一階 医務室

シナリオシナリオ

「（面がする…なんだかしつ…）」（）（）（）（）（）
THREE愛のテーマが流れていると思つてください。）

MO

ネスはリズムよく叩く音を聞いてゆっくりと目を覚ますと、目の前にはピンクボールの体を持った生き物…大粒の涙を洪水のようにめちゃくちゃ流しているカービィがいた。

? 「ネ…ネスティー…！ ネスティーが目覚めたあ…！」

突然カービィが目を大きく開いて寮全体に聞こえるぐらいに声をあげて、俺の耳の鼓膜が破れてしまつほどの音量をまともに受けた。

ネス「力…カービィ声がでかい…！俺の鼓膜が潰れ「目覚めたのかああああ！？！？」

データンクード

俺の言葉を遮るかのように、カービィよりも大きい音量が響き渡り
医務室の扉がタイミングが善過ぎるほど開いて、扉からロイとリン
クとピットとリュカ等が感激の表情を（一部涙目）なだれ込むよ
うに入りこんで来たが…

卷之三

ロイ「押すな……押すなあああ……！」

リンク「轢かれるうううう……！」

ピット「圧迫死されるうううう……！」

なだれ込むように入つて来たため、後ろから倒れるように次々へと入つて来た仲間達が倒れていき、ドミノ倒しの状態になる。

？「まつたくお前らは、狭い医務室に大勢で駆け込む馬鹿野郎がいるか！…」

医務室の奥から医者の格好をしたマリオが現われ、 いまだに積み重なるように倒れている仲間達に向けてやや額にプツチンマークが付いたお怒りの表情になる。

マルス「だつて、ネス君が目覚めたと聞いてついつい……えへ」

リュカ「そつそつー3日ぶりの先輩の顔が見れるということで…ア
ハハ」

マルスとコウカがそう言つた時、倒れていた仲間達も同時に頷く。

ネス「3日振りつて…じゃあ俺は」

カービィ「ネスティーは、マリオのオペが終わってから…3日間も
眠つていたの。」

ネスは心の中で「」の闇と戦つていた時、まる一日の感覚を覚えていたが、こっちの現実世界に戻ってきたときは3日も経ついたためカービィの答えを聞いた時、少しながらの時間差に驚きの表情を出す。

ネス「右腕は……」

ネスは少し時間を振り返つて思い出し自分自身の右腕部分を見ると、あの時…タブーの翼を切り落とした時に強い衝撃でもげた自分の右腕が、縫合した医療用のP.S.Iが宿っている糸で繋がっていることに目を通す。

マリオ「異常もなく繋がった、手術は無事に成功したよネス。だが、しばらくは乱闘・一般市民からの依頼は出来ない。ネスの回復能力から見て、一週間ぐらいは我慢してもらつよ。」

ネス「一週間か…腕が鈍つちゃうね。あはは（汗）」

?「まあまあネス兄い。一週間とこいつもやがて長いから… や
れとこれを、ネス兄いこー！」

?「フフキキー！」

ネス「…」
「…」

ベジタの下から「ニコマーン」とでも効果音でもつけたかのよつこ
猫田リンク（トウーンリンク）が現れて、背中に持っていた可愛い
子ブタ… ポロをネスの懷に押し付けた。

トウーンリンク（通称トゥン）「この子と一緒にいれば、淋しい思
いは無くなるでしょ？」

子ブタ「ふきこいーーー（ねすこーーーねすこーーー）
」

ネス「あはは…（汗）ありがとウソ…俺は…」

リュカ「先輩…」いつの時は…」

仲間の一部が感激の涙を流しながら、ネスも少しだけ涙を流し二日振りに会えた仲間達を一人一人見て、リュカがお約束の一言を言った後、少し…時間を掛けてこう言った。

ネス「ただ…い…ま、みんな…ただいま…！」

仲間達「…おかれり！ネスう…！」先輩…！…坊主…！」ネス君
！…「ネス…！」

：夜 スマブラ寮 一階 食堂：

この後、食堂でネス復活のパーティーを開き、仲間の一人一人が調理場で振るつた手料理がネスの元に届けられ（一部黒こげ）、ネスは仲間達に助けられながら一生懸命作つた食べ物を食べていた。

リュカ「W a a o ! 先輩早いですね~。」

カービィ「すつじーい！ 僕並みの食べっぷりーー！」

ネス「まあ…三日振りだから…かな？自分自身でも気が付かなかつたけれど…」

リュカとカービィは、驚いた目でネスを見つめながら言う。サムスが作った大盛りミートソースが掛かったパスタを残さず五分ぐらいで食べ終えて、更にスネーク・ピカチュウ・ピットが焼いたフワフワのパンをトゥンが持ってきたコーヒーを漱ぎながら食べ終える。

アイク「まあ、男だからな。それと、ネス！こいつでも食つて力を付ける！！」

ネス「えつ！？… ちょつ！…！」

ドシンシード

すると、横から入つて来たアイクが大きいサイズで焼いた肉が香ばしい臭いを放ちながらそのまま鉄板の上に乗つている物を、片手だけで持つてきてテーブルの上にそのまま置いた。

ネス「で…でかいよ！てか…詰まる。（汗）」

マルス「大丈夫だよネス君 もし詰まつたら僕が何とかしてみせ「医者免許を持つて…いる俺が何とかするから、ネス…安心して食べなさい。」

ネス「あ…う…うん（汗）」

マルスが言いかけた時、マリオが冷たい視線で言い放ち一人は二口

「笑顔のままだが、とにかく黒いオーラが出ているのを気にしないでおい」。

ロイ「ああ、ゆっくり食べろー。今ナイフで肉を切つてあげるからさ

」

ロイが手馴れたナイフさばきで分厚いステーキを切り、ネスの口に入れるぐらいた所、食堂の入り口から見た目で高そうな液体が入っているビンを両手で持つソニックが現れて、ネスに近づいてきた。

ソニック「Hey! Ness!-!俺のリング（小遣い）を果たしてまでシャンパン買ってきていたぜー 全員乾杯でもやろうかあーー！」

ネス「ええー?勿体無くな「Anxious! 気にしないー.
気にな
いー.」

「まじでーー」「おおー.気が利くなあーー.」「コシップもつてー
いー.」「嘘じやあああーー.」

ネスの言葉をソニックが遮った時、周りの仲間達がソニックが持つ
てきたシャンパンにコシップを注いだ後、騒がしいぐらー（近所迷惑
並み）ヒゲンチヤン騒ぎになつた。

ネス「ソニック（汗）それに……」

リュカ「いいじゃないですか、先輩」

ネス「（汗）」

リュカの返答を聞いてネスはやや苦笑した後、ネスとリュカはドンチャン騒ぎの場所から逃げるように少し離れて、食堂の窓際まで移動する。ある程度時間を空けた後、リュカが最初に口を出した。

リュカ「先輩が眠っている間…全員精神的にも落ち込んでいたのですから…」

ネス「そ… そなのかリュカ？」

リュカ「ええ… でも、先輩が目覚めるまで僕達は、この時を楽しみにして… 待つていたんです！」

少しだけリュカの表情が暗くなり、ネスはハッとしてリュカの顔を見たが、一瞬にして明るくなり、リュカはシャンパンが入ったコップをネスに近づける。ネスも左手に持ったコップをリュカの持つコップに近づけた後：

リュカ「先輩… ほ… 本当にお帰り… なさい。… ほ… 僕は…」

ネス「...Moreover, it cries.（また、ベソを
かいているな。）（笑）」けど、違うよな。」

リュカ「...これは嬉し涙...です！」

ネス「そのぐらい知っているさ。Hey! My
Mate?（な
あ、相棒?）」

リュカ「Y e s! (はいーー)」

チンッ！

軽く「トップを当てて、二人は窓に映る蒼い月を見ながら飲み始める。ネスはシャンパンをゆっくりと味わい霞む様に光る蒼い月を見ながら、心中でであったウインドのことを思った。

ネス「（ウインドは今何処にいて何をしているのかな？）」

：スマブラ寮 中庭 大木の頂：

ウインド「良い仲間^{チーム}達を持つたな、ネス。」

ウインドは人型を保ちながら林に生えている長い大木の頂から、ネスが居る騒がしい場所を見つめていた。その時…

ヒュオオオ…

…もう一つの長い大木の頂に紺碧の私服を羽織つた短い蒼髪の青年
が、音も無く現れた。

? 「ヒュウツー…いや、ウインドよ…彼ネスに会わなくとも良いのか?」

ウインド「ルカリオよ…私は彼らの傍に居なくて良い…私はもう

…私はもう、この世界から隔離されている…私はもうすぐこの世から消えるのだから。

ルカリオ「し…しかし…それはつ…つ…」

ルカリオは何かを言い出そうとしたのだが、思つよつに言葉が出
すに苦渋の表情が出る。ウインドはルカリオを一瞬だけ見た後、ル
カリオにこう言った。

ウインド「ルカリオよ…私の最期の頼みを…主^{ネス}に伝えてくれないか？」

ルカリオ「な…何を」

ザアアアア
…

木の葉が風で静かに靡かれ少しだけ震えていた時、ウイングは「う
言つた。

ウイング「健全になつたら…』『全ての始まり、そして終わりを告げ
るあの場所』で、私は待つ…と、伝えておいてくれ。」

そう言つた後、ウインドの体が風のよつに一瞬にして消え去つていった。一人残されたルカリオはウインドの言葉を聞いて苦渋の表情のまま顔を手で覆い、そつと言葉の一部が途切れながら呟いた。

ルカリオ「…でやるつもりなのか！？ そんな…とをネスに…せるつもりなのか、…インド…！」

ソレは……ネスことつて……残酷であつて……過酷過ぎやる。

ルカリオは瞳から出る涙で、顔がクシャクシャになり嗚咽でところどころ言葉が途切れながら大木の頂にただ立ち竦むことしか出来なかつた。

⋮ ? ? ? の峠 ⋮

オオオオオ ⋮

本来の姿に戻ったウインドは、無限に覆い茂る鈴蘭が溢れた場所の中心部分に立つていて、風が白い鈴蘭の花ビラを飛ばし紙吹雪のように舞っていた。

「やんばる」これが良一。私はもうわ……」

「お母さんのお話なんだ……無事なのだ。

ワインは無表情のまま、夜空の頂に浮かぶ……蒼い光を放つ朧月を見ながら、心の中をひたすら呟いた。

「やんばる」ああ……主。この私を許してくれ……私は主のことを……」

パタタッ…

ウインドの足元にまだ蕾状態だった鈴蘭に、ウインドの霊が落ちて、
その霊が蕾状態だった鈴蘭をゆっくりと蕾を開かせていった。

ウインド「これは…私の物ではない…主の涙そのものだ。」^{ネス}

ウインドは人によつて作られた究極生命体。感情はネス達に学んだ
物だったのだが、彼には泣くという機能^{プログラム}が入つていなため彼自身

の涙を流すことは出来ない。他人の情報を脳裏にダウンロードすることでその本人の感情を表に出すことができる。

彼はそつと目を閉じて、脳裏に移った未来余地…自分の未来を見た後、少しばかり苦笑いした。

ウインド「私も…^{ネス}主と同じ…人間に生まれていたら…」

ウイングはまだ己自身の涙と感情を持っていないことを、少し怨みながらそのままの状態で蒼い月をただ…見つめているだけしか…他に無かつた。

END

（後書き）

ラストはできる限りハッピーエンドにしようとしましたのですが、ダーカ・シリアルスになってしましました。（謝罪）

なお、ネスはミコウジーの必殺技も使えます。

そして小説に出てきたスプーンは漫画版「ポケットモンスター ヴィルコウジー」から勝手に抜き取りました。

多分この小説の次回作は、ノクターン行きになるかもしがれません。（時間が空いたら…）次回はギャグに挑戦してみようと思います。

ここまで閲覧してくれた皆様、有り難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7426d/>

ただいま ...友の涙...

2010年10月8日23時28分発行